

JAAC だより

今年の就職内定率と今後の就職活動について（2）

— 将来のビジョンと志望企業（団体）の選択が就職活動の鍵 —

前号では、厚生労働省による2010年度（2010年4月1日～2011年3月31日）大学等新卒者の就職内定状況に関する調査結果の発表（本年2月1日（1月末）時点）により、今年の大学新卒者の就職内定率は77.4%であったというお話をしました。今号では、今年3月に卒業した大学新卒者における求人倍率などを参考にしながら、引き続きJAAC生が就職活動を行う際に心がけていただきたい点などを皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

結論から申し上げますが、冒頭の副題で書きましたように就職活動を成功に導くためにはまず、『自分自身の将来のビジョンを持つこと』と、それに伴って『志望企業の選択をする』ことが最も重要なことです。将来のビジョンを持つことは、端的に言えば『自分の生き方』をどのように考えるかと言うことです。これは単に、〇〇会社に入社したい・・・ということではなく、『私は、～の価値観を基に、～の立場として、～のために役立つ』仕事をしたい、と考えることです。何に『価値観』を見出すかはそれぞれ個人によって異なりますね。自分が専攻した分野に関係することを基本に考えたいとか、自分が持っている特殊な技能や才能を活かしたいとか、また、その人の持つ感情や感性、道徳観などに従うなど、その人の価値観は千差万別です。また、『～と立場として』は自分が組織に所属するのであれば、一般企業のような民間組織なのか、それとも公務員や特殊団体などの非民間組織を選ぶのか、ということになります。もちろん、どちらの組織も選ばずに『個人』で独立、起業するというのも選択の一つです。そして、自分自身は『広く社会のために』役立ちたいのか、それとも『身近にいるある人のために』役立ちたいのかを考えるものです。これに付け加えるとすれば、必要に応じて『時期や期間』も盛り込むと良いでしょう。例えば、『私は、世界平和に貢献したいので（価値観）、国連関係の職員として（自分の立場）、広く世界の人々のために役立つ仕事（～のために役立つ）を40歳くらいまで続け（時期・期間）、その後は、その経験を活かしてNPO組織を立ち上げて（自分の立場）、日本の子供たちに（～のために役立つ）平和の尊さを伝えていきたい』という言い方が挙げられます。これは自分の考えを将来のビジョンとして表す際の比較的簡単に手法の一つです。是非、自分の将来を見つめながら、自分なりに実際に紙の上に書いてみてください。

さあ、自分なりの将来のビジョンが書けたら、それを実現するための志望就職先である企業や団体、組織について調べてみましょう。一つひとつの企業や組織について調べるには膨大な時間が必要ですが、『相手を知る』ための作業はとても大切なことです。実は、志望する企業や組織についてどれだけ時間を費やして研究してきたかが、内定を取り付けるための大きな鍵になっているのです。前号でもお話しましたが、求職者である皆さんと、求人側である企業との間のミスマッチが起きるということは、自分のビジョンに合った企業や団体に対して就職活動をしていないことも原因の一つなのです。というよりも、自分のビジョンが描けていないにも拘らず就職活動をしていた結果とも言えましょう。ここで言う『求職者と求人側とのミスマッチ』ということの一側面は、今年の新卒求人倍率にも如実に現れています。

厚生労働省が発表した、今年2011年3月大学新卒求人倍率は1.28倍でした。つまり、求職者（就職活動の学生）1人に対して求人側（企業）は1.28社あったということです。この数字から、単純に考えれば新卒者全員が就職できたこととなります。しかしながら、実際には先にも述べたように、今年の大学新卒者の就職内定率は77.4%（2月1日（1月末）時点）であって、数の上では10人の内約7人から8人しか就職できなかったこととなります。このような結果が生じた原因は、例年のごとく大企業や有名企業への就職希望学生が殺到したからにはほかありません。従業員数別にみる企業の求人倍率指標を見てみると、従業員数5,000人以上の企業の求人倍率は0.47倍、従業員数1,000人～4,999人の企業では0.63倍、従業員数300人～999人の企業で1.00倍、従業員数300人未満では4.41倍という結果でした。つまり、従業員数1,000人以上の大企業ではおよそ10人の内5～6人しか採用されていないという狭き門に対して、従業員数300人～999人の中小規模の企業1社に対しては1人が就職でき、従業員数300人未満の小規模企業では求職者1人に対して4社が求人を行っていたこととなります。多くの学生が大企業や有名企業への就職を希望することは世の常ではありますが、このことが『求職者と求人側とのミスマッチ』と言われ、結果として史上最低の新卒内定率を生み出しました。誰もが将来の安定を考えると、大企業への就職を希望することは当然のことかもしれませんね。（次ページに続く）

大手思考の人たちの考えに水をさすわけではありませんが、運良く(?)、偶然にも(?)、大企業に就職できたとして、その内の何人、何%の人たちが自分の将来のビジョンに合った企業に就職できたのでしょうか。ややもすれば、自分のビジョンとは関係なく、『大企業ならどこでも良かった』という人もなかにはいるでしょうし、また、『この企業に入ったからには、～のようなビジョンを持って仕事をしていきます』などと、就職が決まってから自分の将来設計をする人もいることでしょう。そのような人たちもいわゆる『勝ち組』に属するのでしょうか、それが自分自身の本当の幸せに繋がるのかどうか、老婆心ながら疑問を持たざるをえません。人生は長いものです。一時の満足感と安堵感だけで、自分の人生の方向性を決めてしまうのはどうかとも思います。

また、優良な企業や将来有望な企業とは、それイコール大企業や有名企業とは限りません。まだまだ日本には、一般には知られていない『超』が付くほど優良であり、将来において有望な企業がたくさんあります。それらの多くの企業は中小の規模であるがゆえに、毎年、約1,000万円以上はかかるという就職情報雑誌への企業広告を継続的に出していないために、世の中の人々にその存在を知られていないことが多々あります。そのような企業の中には、製造している製品が世界的なトップシェアを占めていたり、宇宙、科学、医学、薬品、建設、IT関係などといった産業や社会生活において欠くことのできない製品を扱っている企業も少なくありません。つまり、就職活動において企業を調べて研究するという事は、世の中に出回っていて誰もが手にすることができる就職情報雑誌を唯一の教科書とすることではないのです。できるだけ多くのメディアや情報誌、専門誌といったツールを利用して、自分のビジョンと照らし合わせながら、自分に最も適した企業を数多く選び出す作業が大切なのです。繰り返しその作業を行うことで、最終的な志望企業を選択することができるのです。その作業を行った結果として、大企業あり、中小企業あり、そして、小規模の企業もリストアップできたということが、就職活動における企業研究ということになるのではないのでしょうか。

このような地道な準備を進めていくことで、受ける必要のない企業の面接試験は受けず、是が非でも受かりたい企業への試験対策に時間を費やすことも可能となることでしょう。就職試験は、求職者である皆さんと求人側である企業との真剣勝負です。であるならば、まず『相手を知る』ことが不可欠ではないのでしょうか。戦(いくさ)であれば、戦う相手の強みや弱みを予め知っておくことが肝心であるように。自分のビジョンと選び出した志望企業がマッチしていれば、多くの企業との面接試験に臨んでも、自分の姿勢にぶれは生じないはずで、企業の人事担当者や面接担当者は、そのブレを見逃しませんよ。だからこそ、企業の担当者は『他にどこか別の企業を希望したり、受けていますか?』などといった意地悪な質問もしてくるのですから。

どうか皆さん、就職活動を始める前に、また、既に始めている方におかれましても、自分の将来へのビジョンを改めて考えてみてください。就職活動は単なる職探しとは違います。皆さんそれぞれの生き方そのものを映し出していく第一歩なのです。最初に踏み出す一歩は小さくなくても良いのです。皆さんが一步、さらにもう一步と、人生を歩んでいくことを止めなければ、それで良いのではないのでしょうか。
(カリフォルニア事務局：照井)

特別コラム：“東日本大震災から2ヶ月・・・”

— 見えてきた心のケアの必要性和重要性 —

東日本大震災から約2ヶ月が過ぎました。今回もまた皆さんと、この震災が齎した出来事についての想いを共有できたらと思っております。

岩手県釜石市出身で栃木県在住の私の友人が、震災後に2度ほど彼の故郷である釜石市にボランティアとして行ってきました。後日、彼は電話口で涙を流しながら、まるで自分の家族が犠牲になったかのように現地の悲惨な状況を私に話してくれました。特に彼が感じたことは、避難所で不自由な生活を強いられている幼い子供たちの心のケアの必要性でした。彼は避難所の外に風力と太陽光による街路灯を無償で設置してきたのですが、夜間に作動状況を確認しに行った際に、時折、避難所の中から子供の泣き声を聞いたそうです。翌日、避難所の防災担当者にそのことを尋ねると、小さい子供たちも、大人も皆まだ津波で近親者や友人を亡くした悲しみや、地震の恐ろしさから心が癒えず、毎夜のように夢にうなされ、泣き出す者が絶たないことを知らされたそうです。突然襲った天変地異のような出来事で、親兄弟、親戚、自分の子供や友人を失った悲しみは、被災した方々にいかほどの痛手を与えたのか測りようがありません。想像もし得なかった出来事を体験した人たちにとって、その恐ろしい体験がトラウマやPTSD(心的外傷後ストレス障害)となって襲い掛かってきているようです。

多くのボランティア活動グループの人たちが被災地で活動しているなか、医師や看護師による医療活動は十分なののでしょうか。地元の診療機器が絶対的に足りていない現実が報道されているなかで、心の傷を負った人たちのケアはどのようになっているのでしょうか。子供たちにとっては学校が始まって、震災前には同じ教室にいた子や、担任だった先生が突然消えてしまった現実を受け入れるにはあまりにも幼すぎる年齢です。精神的な苦痛から開放されて、心の底から元気な笑い声を再び出せるようになるのでしょうか。生活物資の提供が必要なことなのは分かりますが、目に見えない弱者の心のケアこそが最優先されるべきなのではないかと思っております。彼らに一日も早く心の平和が訪れることを祈っています。(照井)

コラム：『異文化理解』ということばが持つ奥深さ

— 何故、これほどまでに異文化理解は難しいのか・・・ —

『何故、これほどまでに異文化理解は難しいのか?』。この想いは長年にわたって国際教育・交流という分野で仕事をしてきた私にとって、今でも私の前に歴然と大きく立ちはだかっている壁です。『異文化理解』ということばから、JAAC生の皆さんは自らの留学経験を通して得られる日米間の文化の違いの理解と解釈するかもしれませんね。それも、私が言いたいことの一つではあるのですが、今回、このことばを持ち出したのには別の視点からの理由があります。それは、先だって、世界を震撼させる出来事として、アメリカ海軍特殊部隊 SEALS がパキスタン国内に潜伏していた、9.11 テロ事件の首謀者とされていたウサマ・ビンラディン容疑者を殺害したことでした。この出来事の詳細や経緯については報道されている通りで、すでに皆さんもご存知のことですからここで多くを語るつもりはありません。しかし、私が思うことは、結局、とどのつまりはキリスト教とイスラム教との間の宗教観の違いが原因の一つではなかったのか、ということです。それはあたかも、11世紀末から13世紀にかけて行われた十字軍の遠征の延長線上にある戦いが現代でも行われているかのようで仕方がないのです。

『文化』の定義を見ると、そこには宗教も含まれています。つまり、異文化理解とうことばには『異なる宗教観』をも理解する、ということが含まれているはずなのです。そこにはおそらく、この『理解』ということばの持つ意味も大きく関係するのだと思われます。言葉尻を捉えるわけではありませんが、おそらくこの場合の『理解』という意味には、異文化への『適応』という意味は含まれていないのかもしれませんが。単に『理解』するということは、その存在を知ること、それを受け入れ、それに適応していく様とは異なるのかもしれませんが。

留学生を送り出す際に、私は異文化理解の大切さを説いてきました。しかし、この『異文化理解』ということばの持つ奥の深さというか、奥の深さともいべきものに改めて脅かされました。容易に『異文化理解』ということばは使えない、と改めて思い知らされた次第です。まるで、いきなり誰かに頬を叩かれたような気分なんです。

もちろん、話題となっているアメリカとテロ組織アルカイダとの関係が宗教上の問題だけなどとは思っていません。国際関係、国際政治上の問題でもあり、アメリカという国の、言うなれば帝国主義的な外交政策などが複雑に入り混んでいることは皆さんもご承知の通りです。それらが複雑に交わり合いながら各国の外交政策が行われているのならば、真の意味合いでの『異文化理解』ということばは理想のまた理想ということになってしまいかねません。国際外交上、相手の国のことを知る術として『異文化理解』ということばがあるだけならば、それはとても悲しいことだと思います。一般の市民グループや団体、学生や若者たちの国際交流事業に携わってきた私のような者にとっては、一般の民間人にとっての『異文化理解』という観念と、政治家や国を主導する立場にある者たちが考える『異文化理解』ということばの持つ意味合いが微妙に、あるいは完全に違うのかもしれない、と思う次第です。分かっていたこととは言え、改めて気づかされると、何とも言えない悲しさや、虚しさを感じてしまいます。

確かに、誰もが異文化との出会いで、ものの考え方や生活文化の違いに大きな戸惑いを感じることでしょう。そこには自分が住み慣れた母国の常識が通用しないことを思い知らされます。しかし、そこで文化の違いを認識し、それらを受け入れる難しさを克服してこそ、相互理解が生まれるわけです。たまたま『異文化』ということばを使っていますが、これはもはや文化の異なる国家間を想定して使われることばとしてだけでなく、歴史と伝統を忠実に守ってきたその同じ国の中でも、異なる世代間で感じる違和感を象徴して、『異文化』ということばが使われているようにも感じます。日本においても、若者文化にはなかなかついていけないという世代があるように。 (カリフォルニア事務局： 照井)

Let me remind you^{***}

★JAAC生の皆さん、保護者の皆さん、何でもお気軽にご相談ください

◆就職活動をする JAAC 生の皆さんへ： 6月に東京ビッグサイトにおいて東京サマーキャリアフォーラムが開催されます。夏休みに帰省される方は是非この機会を有効に利用してください。詳しくは下記の URL から、<http://www.careerforum.net/event/tks/> をご参照ください。また、大学卒業後にアメリカの大学院に進学される方は、海外大学院合格者ジョブフェア 2011 が5月に東京で開催されます。詳しくは以下の URL から、<http://www.axiom.co.jp/event/jf110528/index.html> をご参照ください。

その他、インターネット上では海外大学卒業生（見込み者）を対象としたジョブフェア等の情報が掲載されると思われるので、随時、各自でインターネットでの検索を行ってください。

●JAAC 本社内保護者様専用ご連絡・ご相談窓口：

フリーダイヤル 0120-525-626 tokai@jaac.co.jp 担当：高瀬

JAAC 日米学術センター 鈴木：t.suzuki@jaac.co.jp ©カリフォルニア担当：照井 k-terui@mtg.biglobe.ne.jp